

これからの宣教を考える―SDGs という視点から¹

宮 本 新*

1. 人・社会、そして世界

パンデミックは堅固と思われていた社会的な諸機能をいとも容易く停止させるにいたりましたが、教会もまた礼拝の“休止”という事態に迫られることになりました。こうした事態は今後もしばらく続いていくことでしょう。しかし悪いことばかりではありません。これらの体験を通じて私たちは歴史に埋もれていた数々の「未曾有の体験」という記憶を思い起こし、深い学びとする機会にもなりました。ルター研究もまたその例外ではありません。ルターとその時代の人々が直面したのはペストでしたが、コロナ禍を通じて、その個別の状況を超えて普遍的な洞察があることがよりよく理解されるようになりました。たとえば、1527年のルターのペスト書簡では、ペスト禍のもとで人々がどのように振る舞うべきか、以下のように述べています。

医療に頼り、助かるために必要のことは何でもしなさい。家や庭、通りを燻しなさい。不要

不急の外出を避け、人に会うのも避けなさい……。しかし、隣人が私を必要としているなら、人も場所も避けることなく、すでに述べた通り、進んでそこへ行き、助けます」と。さあ、これが真に神を畏れる者の信仰です²。

驚くほどこんにち的な発言ではないでしょうか。しかしこれが神学的な発言であることにも注意を払いたいと思います。ルターにとって、感染症対策は信仰の事柄であり、さらにその信仰は三つの次元で考えられるようになっていきます。一つは私たちが慣れ親しんでいる個人的なレベルの信仰理解があります。人は試練に遭遇する時、神を深く信頼し、祈り、願う者となり、その心に働きかける神の言葉に耳を傾け、慰め励ましをえることがあります。「こころの宗教」として思い起こされる信仰です。しかし守られるべきなのは人の心だけではなく身体もまたそうであり、心も体も守られることは神の関心事なのです。しかもそれは決して自分のいのちだけが守られてよい話ではなくて、つねに隣人という他者が意識されています。だからこそ先の引用のとおり、自他のいのちを気遣い配慮する責任を伴うことになります。こうして信仰には社会的な次元を伴うことが明らか

* Miyamoto, Arata
ルーテル学院大学、日本ルーテル神学校

になります。こうした信仰の個人的な次元や、社会的な次元というものはこんにちでもよく知られていますが、感染症に直面したルターは、さらにもうひとつ別の次元も見ていました。この第三の次元をここでは信仰の“世界性”と呼んでおきたいと思います。

この世界性とはこの自然世界の被造性を意識することであり、またそこに生息するのは人間だけではありません。ウィルスも細菌も、そして他の生物もみな含めたところで共生の世界が視野に入らなければ、今回のような感染症を神学的にとらえていくことは難しいのではないのでしょうか。この自然世界は、信仰の理解では、神がお造りになられたいのちの世界であり、人間だけが存在しているわけではありません。ペストもコロナも共通しているのは、それが深く個々人の魂の問題や、隣人問題にかかわっている一方で、その私たちという存在が他の生物や複雑な生態系、環境世界と密接にかかわりを持って生きていることをあらためて認識しなおす機会を与えています。この世界が被造世界であることの意味は、自他の心と体も、そのいのちを守りたいという思いも、そして生存のための知恵や努力も、すべて神さまの関心事であることを真剣に受けとめるところにあり、そこで避難し逃れることでさえも信仰上の事柄として尊ばれるべきことをルターは説いています³。

本日の「これからの宣教を考える」というテーマを考えると、この神学の三つの次元を心得ておくことはとても有益なことのように思います。なぜなら、このような私・社会・世界という多元的な視野をもって信仰を捉える機運はコロナにはじまったことではないからです。これから皆さんと学ぼうとしているSDGsもまたこの三つの次元からアプローチするのがふさわしい主題です。SDGsは地球規模の課題対応であると同時に、一つひとつのいのちの問題に向かっていく繊細かつ壮大なプロジェクトです。SDGsとコロナ禍は期せずしてこのようなさまざまなレベルで信仰を理解し、その信仰から私たちが取り組んでいく宣教の視野を格段に広げる出来事にもなります。

SDGs ～とは何か

SDGsとはSustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略称です。2015年9月に国連で開かれたサミットで、国際社会が共通の課題を議論し、これに取り組むための目標がかかげられました。その国内での取り組みは、積極的に推進するいくつかの層（グループ?）を考えると理解しやすいでしょう。一つは官民一体となってSDGsに取り組む層であり、官公庁や大企業などの取り組みが見られます。しかしSDGsの取り組みは大企業や官庁だけのものではありません。既存のNGOやNPOの多くの市民レベルの活動がこのSDGsに取り組んでいます。すでに草の根的に長年にわたり、様々な社会課題を見つけて、このSDGsにリンクして活動を地道に継続している人たちもたくさんいます。その中にはSDGsに飛びつくのではなく、批判的に考え、そして自分たちの活動や信念に合致する仕方で行き入れているような人たちもいます⁴。またSDGsに関連付けたソーシャルビジネスに取り組もうとする若い人々も増えています。そして三番目の層として学校・教育関係のSDGsも目立った活動をしています。小・中学校の教科書では、すでにSDGsを学べるようになっていて、大人世代よりも子どもたちの方がSDGsについては詳しいという状況が作られています。また大学のような高等教育機関もSDGsに積極的です。もともと自分たちの建学の精神や、個々の研究理念と合致する開発目標が少なくないので、これに積極的な取り組みを見せていく。そのことがSDGsを自然に受け止めている若年層に対して学校のアピールにもなっています。逆にSDGsに理解を示さない大学や企業というのは一体何なのか、という風に映ることもあるでしょう。このような大きな流れから、私たちキリスト教界の動向に目を転じると、SDGsの結びつきはあまり活発ではないように見えます。しかしそれはキリスト教とSDGsが関係ないと結論づけるには慎重でありたいと思います。たとえば、SDGsは国内外の社会課題に横断的に関わることを求めますが、そのようなかわり方や活動を教

会も長らくしてきました。ですから、皆さんとこうしてSDGsを学んでみると、自分たちのやっていることがこのSDGsの開発目標の理念といくつも重複していることに気が付いて、「なんだ、そんなことか」と思われる人もいらっしゃると思います。相対的に目立たないというだけであって、SDGsとキリスト教が宣教上大事にしてきた価値観や問題意識が重なっているところも少なくないのです。このことは、国際的なレベルのキリスト教とSDGsのかかわりを見るならば、もっと明瞭になります。ここではまずキリスト教とSDGsの基本的な構図を理解するために、マクロなレベルでルーテルとSDGsをケースとしてみておきたいと思っています。

2. コンテキストとしてのルーテル

ルーテル世界連盟（Lutheran World Federation、以下LWFと記す）は、2018年10月にウェイクニング・ザ・ジャイアント（Waking the Giant「巨人を目覚めさせる」の意、以下WGと記す）という独自のSDGsプロジェクトを立ち上げています。すでに2015年にはニューヨークで国連の担当者と綿密な協議を経て、SDGsの初期から協力的な関係を築いています。WGに関するプレスリリースには、国連の事務総長が同席、担当者のコメントがメディアに掲載されています。これらの一連の大まかな経過も含め、LWFとSDGsの関わりから、私たちの「これからの宣教」について考えてみたいと思います。しかし、まずここで確かめておきたいことがあります。それはSDGsに関与するLWFは、前後してもう一つ大きな出来事を経験していました。宗教改革500年です。これもルーテルが次の時代に歩みを進めるために教会と宣教について深く思いを巡らす機会となり、そこでSDGsという流れとも合流しています。

宗教改革500年～争いから交わりへ

2017年に迎えた宗教改革500年は、国内のルーテル教会でも数々の行事を通して記念されました

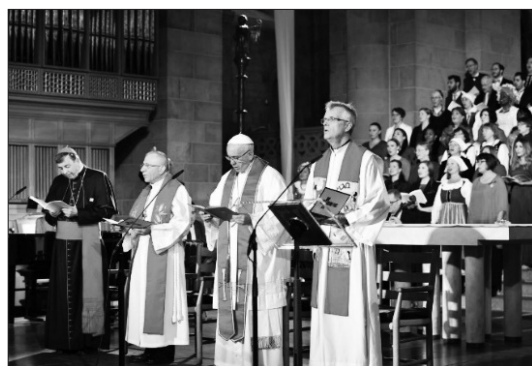


写真 1

が、ここではこれを歴史上の出来事としておもに2つの視点から考えてみたいと思います。まず第一の点は、「到達点としての宗教改革500年」です。エキュメニズム（教会一致運動）は過去100年ほどのキリスト教の流れを理解するキーワードとなりますが、1517年の宗教改革運動もまたこのエキュメニズムの流れから理解してみることが重要です。ルーテル教会にいと、「ルターは贖宥状に反対して改革運動を推進した」という物語に親しみをもちますが、一般の世界史の教科書を見ると、むしろ宗教改革とは、争いと分裂の出来事と理解されています。教会分裂としての1517年です。その当事者としてローマカトリック教会とプロテスタント教会があり、その歴史の突端にルターがいて、ルーテル教会が生まれました。この「争いの歴史」が大きく動いたのは前世紀1960年代のことでした⁵。両教会が争いから交わりへと舵をきり、それから50年にわたる対話と相互理解が重ねられ、それが宗教改革500年の基盤になっています。正式な対話の委員会が設けられ「義認の教理の共同宣言」（1999年）や「争いから交わりへ」（2013年）といった重要な合意文書も作成されました⁶。これは500年の教会分裂を視野に50年という年月をかけた両教会のエキュメニカルな到達点を示しています。これが宗教改革500年に見られた歴史の到達点です。しかし宗教改革500年には、このような到達点を示しているだけではありません。飛躍と転換点を示す未来志向型のもう一つの視点があります。「転換

点としての宗教改革 500 年」です。この二つの視点は、私たちが「これからの宣教」を考える際には是非とも押さえておきたいコンテキストになります。

この「転換点としての宗教改革 500 年」を考えるために紹介したい一場面があります。この写真は 2016 年 10 月 31 日、スウェーデンのルンドで、教皇フランシスコと LWF の議長ムニブ・ユナン牧師が並び立たれている写真です。500 年の時を隔てて両教会が「共同の祈り」を共にする歴史的な場面であり、両者はもはや争い顔を背け合うのでもなく、お互いに差し向い対話するだけでもなく、さらにその先へと進もうとしている意志が感じられる場面です。神を前に、そして隣人と共に未来へ、という両教会の方向性であり、「前を向く交わり」というユニークな転換点をこの写真は象徴しているように思われます。

ポスト宗教改革 500 年～祈りからミッションへ

「共同の祈り」では両教会がエキュメニカルな 5 つの責務を読み上げ共同の宣言をしましたが、実はその直後にもう一つの共同声明が出されています。こちらの声明が発表された場所がマルモ・アリーナであったことからマルモ宣言と呼んでおきたいと思います。この宣言もまた「共同の祈り」の共同宣言に劣らず重要な意味を持っています。両教会にはそれぞれに国際協力や人道支援の巨大な NGO 機関があるのですが、この両機関がマルモに会して、宣言したのがこの声明です。祈りから実践という姿勢から、カトリックのカリタス・インターナショナルとルーテルのワールドサービスは、持続可能な支援活動を全体の視野に入れて、1) 難民と移民、2) 平和構築と和解、3) 人道支援の充実と実施、4) 持続可能な開発目標の実行、5) 宗教間の対話の促進、という 5 つの領域で協働する内容に署名をしています⁷⁾。

ここで注目したいのは、長年に両教会が取り組んできた難民と移民の支援活動に加えて、持続可能（サステイナブル）な支援活動を声明に盛り込んでいることです。すでにこの段階で国連の

SDGs は両機関の現場レベルでは浸透し具体的なプランとなっていたのでしょうか。この現場レベルの実践の方向性と、他方で 500 年 -50 年という両教会の対話と相互理解の枠組みとがカチッとここで組み合わせられているのは興味深いことではないでしょうか。それは神学と宣教の整合性でもあるからです。SDGs とルーテルは、この宗教改革 500 年においてすでにスタートし、「共に前を向く」ための具体的な方途になっています。それ故に、一方から見れば、国連の SDGs にルーテル世界連盟が参画するという視点があり、他方でルーテルのコンテキストにおいて、ポスト宗教改革 500 年の新しい宣教的展開としてこれを見ることが出来ます。異なる観点から一つの事柄が見られる構図です。

ポスト宗教改革 500 年に立つ LWF の宣教のビジョンは、共に未来に向き合う交わりであり、その具体化は世界課題に取り組むことでした。ここには「神を前に隣人と共に」という古典的でオーソドックスな宣教の基本姿勢が踏まえられており、この流れはこれから先 50 年、100 年の単位で両教会の宣教方針の基本になるでしょう。この世界は被造世界であり、独り子を愛された神様のお心の成就が祈られる世界です。それ故に宣教とは神様がお造りなされた世界で、神様のお働きに参与するキリスト者の奉仕の業となります（ミッシォ・デイ）。さらに、もう一つ重要なアクセントは、その世界性のゆえに常に隣人たる“他者”が意識されている点です。宗教改革 500 年の場合、ルーテルにとってカトリックがそうであり、逆もまたそうでしょう。そこで私たちは、キリスト者だけの世界で奉仕をしているのではなくて、神様がお造りになられた被造世界で生きて生かされる他者と共に、これに取り組む宣教となります。これが SDGs に参与するルーテルのコンテキストとなり、宗教改革 500 年に見られる到達点と転換点となります。

3. SDGs とキリスト教～ LWF の場合

ここで LWF が SDGs に参与し現在にいたる経

過を簡単に見ておきたいと思います。まず時系列として大事なのは、国連で開かれた代表者会議、サミットが開かれた2015年9月でしょう。そこで国連は国際社会で17の持続可能な開発目標と169項目の具体的なターゲットを掲げて、これに取り組むことを世界に発信しました。その指針は15年先の2030年までの長期的な開発です。私の知り得るごく一般的な説明となりますが、この目標とターゲットの数多さと、その時間の長さには、人類文明がもたらした地球環境のダメージの深さと、またそこに生存するいのちあるもの、そして人間自身の暮らしと生存の脅威が反映されています。たとえば、17の目標には目標1「貧困をなくそう」や目標2「飢餓をゼロに」がありますが、ここには世界人口の1割が貧困にあえいでおり、8億以上の人々が空腹と栄養不足の環境下に置かれている厳しい現実が指摘されています。同様に、目標3「すべての人に健康と福祉を」は、毎年500万人以上の子どもが5歳を超すことなくその命が途絶えていることを背景としていますし、また文字の読み書きや計算ができない人が6億人もいることから目標4「質の高い教育をみんなに」という目標が据えられています。それぞれの目標には、途方もない地球規模の問題が横たわっているのです。このような目標が抽象的に響いたり、あるいは遠い世界のどこかの問題である、という漠とした思いがあるならば、このSDGsの17の目標を17個もの世界を見るための窓のように見立てて学ぶのも一つの手かもしれません。そこで焦点が絞りこまれ、また視野がもたらされることもきっとあることでしょう⁸。これらは国境を超えて、広く共通する社会課題であるだけではなく、宗教的な課題であり、政治経済の問題であるだけでなく、人間の福祉と安全の問題だということです。問題の切迫性は個々人のものであると同時に、この世界に存在するいのち全体の脅威でもあるのです。これをルーテルの目線、社会的と同時に、宗教的な課題として深くとらえて、広く手を結んでいける働きにしてい

く。これがLWFがSDGsへの参与として独自のWaking the Giantというプロジェクトを始動するコンテキストになります⁹。

サステナビリティ（持続可能性）について

ここでSDGsの「S」＝サステナビリティについて説明を加えたいと思います。すでに様々な場面で使われ広く知られた言葉ですが、この言葉に込められた肝心な点を確認しておく方が後々の議論に有益だと思うからです。持続可能性には「未来に対する責任」が含まれています。これをとてもわかりやすく説明しているイラストがあるのでこれを用いてみます¹⁰。ここに描かれている三連のイラストは、左から右へ持続可能性が何であるかを説明しています。一番左にあるのは、食べ物をみんなで分ち合うのではなく、一人占めをする。これはサステナブルとはいえません。分ち合いがないからです。次に、真ん中のイラストには、そのような独り占めはありません。その場にいる人たちがケーキを分ち合っているのです、一見問題がないように見えます。ところが、持続可能性という点からいえば、これも十分とはいえません。なぜなら、この分ち合いはあくまでその場にいる人たち“だけ”で行われているからであり、「後に来る人たち」、すなわち未来の他者のことが考えられていません。このイラストをはじめて見た時に、私自身もどうして分かち合いだけではダメなのか、すぐに気が付きませんでした。今いる人たちの分かち合いだけではダメなのです。

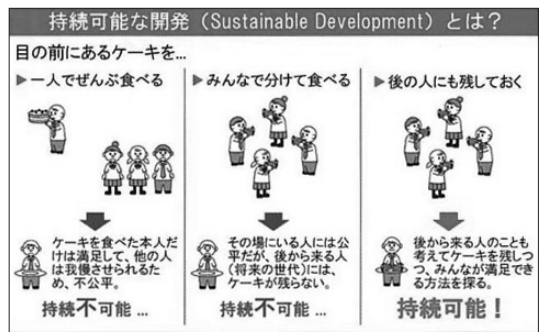


図1 持続可能な開発とは？

このSDGsの中心概念であるサステナビリティは、私たちの宣教や信仰にインスピレーションを与えてくれます。たとえば、イエスの宣教は神の国の到来とそのビジョンを指し示していますが、そのビジョンはSDGsのような地球規模の課題と、そのローカルな課題と、双方に響きあうようになっています。そもそも2000年前にパレスチナでお生まれになられたイエスの宣教にとって、現在の私たちこそが未来の他者ではないでしょうか。私たちの宣教はこのイエスの宣教につながり、その波動において生かされているようなものですから、イエスが「世の終わりまで」といわれた約束は決定的な重みを持っています。つまり信仰も教会も、そして宣教も、まだ見ぬ人たちの間にも、世の終わりまで有効な神の恵みの壮大な分ち合いの連鎖があることを思い起こさせます。イエスの30年あまりの短いご生涯、十字架と復活、その後のキリスト教の宣教……これらを通して体現し伝えた神の国のビジョンは、こんにちの持続可能性との響きあいを考察する余地がまだまだあると思います。LWFの場合、SDGsについての聖書研究教材を開発して、以上のことをさらに教会が深く掘り下げられるよう後押ししています。

ルーテルのSDGs

2018年10月10日にLWFは、SDGsプロジェクトとしてWaking the Giant（以下、WG）を立ち上げ、まずリベリア、タンザニア、コロンビア、米国4か国のルーテル教会とその関連機関でパイロットプロジェクトを実施することになりました。その際の開発目標は、目標3「すべての人に健康と福祉を」、目標4「質の高い教育をみんなに」、目標5「ジェンダー平等を実現しよう」、目標10「人や国の不平等をなくそう」、目標16「平和と公正をすべての人に」といった5つを中心に据えました。翌年には、トレーニングキットなどオンラインでの展開についてプレスリリースをしています。そこでジュネーブの国連の事務総長マイケル・メラー氏が同席し、教会とその機関が

SDGsと連携することの意義深さについてスピーチをしています。そのスピーチで興味深い点は、メラー氏のように国連サイドの人たちの教会理解です。彼らの視点では、LWFことルーテル教会が99か国、148の教会というグローバルかつローカルな宗教コミュニティである事実と、その持ち味が重要なのです¹¹。LWFの事務局長であるマルチン・ユンゲ氏は、これをルーテルの自己理解として、「SDGsは教会が長らく自らを関与し奉仕してきた隣人奉仕の新しい機会であり形であること」と述べています¹²。この点については後程改めて取り上げたいと思います。

LWFのSDGsの取り組みは、まずパイロットプロジェクトとして、4か国のローカルな宣教課題への取り組みとしてはじめられましたが、まもなくしてSDGsのリーダー研修を開催したり、SDGsの学習キットやトレーニングキットの開発を進め、その教材をオンラインで公開します。またこれと前後して、五つの開発目標を各地のルーテル教会や関連機関が自ら振り返り診断できる「SDGs自己診断ツール」を開発し公開しています¹³。こうして2021年の春までにWGは、4か国のパイロットプロジェクトから、99か国148教会に向けて共同ブランディングを呼び掛ける段階に到達しています。

2021年4月、WGのロゴを提供し新しいプロジェクトが立ち上げられています。この共同ブランディングプロジェクトは、LWF関連教会と機関がそれぞれの地域で活動が持続可能な開発目標と一致している場合、このロゴを活用してSDGsのネットワークを可視化する、というプロジェクトになっています。下の図は、LWFのWGのロゴデザインです。左側がLWFのロゴデザインであり、右側がWGのロゴデザインになります。そしてこれを99か国148の教会に共同ブランディングとなるよう呼び掛けています。その場合、左側のLWFのロゴに参加教会や機関のロゴが載せられ、右側にWGのロゴが来ます。こうしてLWFが促進するグローバルなプロセスに参



図 2

画することを表明し、すでに過去数年にわたりWGが構築したSDGsの学習教材などが積極的に用いられる仕組みが整えられたことになります。この148教会の一つとして日本福音ルーテル教会も数えられていることになるので、「これからの宣教」をこのようなグローバルな視点から考えることもますます可能になっています。

4. SDGsの視点から考える宣教

ルーテルと世界性

まとめに入りたいと思います。LWFのSDGsプロジェクトであるWGの流れを見てきましたが、そこにはルーテル教会の神学と宣教の特色が見られます。その一つが最初に申し上げた“世界性”を視野に入れることです。一般的に私たちが世界を考える時、国内に対して“海外”という意味で考えることがあります。世界宣教という場合もそう理解されるならば海外宣教と同義的です。習慣的なものですから大した問題ではないと思われるかもしれませんが、だからこそ、かえって根深い問題があるとも言えます。問題は、“世界”という言葉がそのように内と外に切り分けられるとき、“私たち”というローカリティからグローバルティ、そして公同性（普遍性・カソリシティ）がどこか遠くにあるものになり、切り離されてしまうところにあります。そこではもはやLWFが考えている神学の世界性もかえりみられることなく、本来の世界宣教の意味もそぎ落とされてしまうのです。

このような世界性を踏まえて考えるならば、私たちが当たり前のように接している地域教会（各

個教会）の存在を真剣に考えなおす契機になります。特に大事なはその教会のローカリティにグローバルティや公同性が埋め込まれてもいることを理解することです。もちろん、“私たち”というローカリティがグローバルティを代表しているわけでもなければ、占有しているわけでもありません。それは丁度、目の前の“その人”の中にこそ人間性が見られるのであって、その具体性を無視した人間性の議論は空虚であるのですが、他方で今いる人やグループだけが人間性を占有し、人類を代表しているわけでもないという両面理解と似ています。ルーテル教会が地域（各個）教会も教会と呼び、同時に日本福音ルーテル教会という全体教会もまた教会と呼ぶことを理解するには、このようなグローバル×ローカルの両方向に伸びる議論のバランス感覚の上に成り立っています。もしこれを本部と支部のような関係で全体教会や各個教会を理解したり、逆に各個教会の連合体のように可算的に全体を考えると今申し上げたようなダイナミックな各個教会の理解から遠ざかってしまうでしょう。同様に、「世界宣教」とは私たちがどんなに（国）内-（海）外という心象を持つとも、それは地域宣教のことであり、それ以外にありえないのです。ある特定の地域の宣教が決して世界宣教を代弁代表しているわけではありませんが、かといってその地域（各個）教会をすっ飛ばしたところでは、どこにも世界宣教などありはしないのです。これがグローバル×ローカルを同時的に、しかし不可分な関係でとらえるLWFの宣教と教会の理解になると思います。いうまでもなくJELCの教会と宣教の構造もこれと本来は同じであるはずす。

SDGsをめぐる国連がLWFに期待を寄せているのは、このローカルネットワークを基本とするルーテルです。アフリカでも、南米でも、北米でも、そして日本でも同じように各地でルーテルの伝道、教育、奉仕の業が繰り広げられている、という視点から見直すならば、私たちはこの地上にあって同じ宣教にあずかり、また奉仕していることになります。わたしたちは地域教会として地域

の宣教に従事しているけれども孤立し単独で行っているわけではない、という理解が一層鮮明になります。私たちはLWFの構成メンバーであると同時に、地域教会として一つの教会でもあるのです。国内の地域教会の宣教活動は、この世界性の脈絡においてみれば、それが“世界宣教”でもあるわけです。これはSDGsに関係なく、私たちのこれからの宣教においてかかせない視点になると思います。

なぜ教会なのか？

そもそもLWFのような宗教コミュニティがなぜSDGsに積極的にかかわるのでしょうか。この点について、フィンランド大学で「宗教と開発」を研究するアンティ・ライネ（Antti Laine）は興味深い指摘をしています¹⁴。まずSDGsから見た「宗教」とは、私たちの社会が漠然と有する宗教の印象とかなり違います。ライネによると、国連がSDGsを通じて宗教コミュニティに対して関心を寄せるのは、世界人口の84%がなんらかの宗教グループやコミュニティに帰属しているという単純な事実根拠に根差しています。しかしそれはただ数の多さをいっているのではありません。教会のような宗教コミュニティは自己目的よりも常に遠心的に外に働きかける性質があること、持続的なネットワークを持ち合わせていること、そして地域に根差し人が人を励まそうとする団体特性があることを挙げています。それらはSDGsを推進するための基本的な価値観に関係します。このような特性には、物事を平和的に解決を目指すことに至高の価値を置いていたり、正義と公正が政治や社会にも優先的に重んじられるべきだ、という考えをうながす役割が宗教コミュニティにはあります。もちろん現実の宗教団体や教会というものがないとその言葉の通りになっているわけではありません。しかしそういう現実を踏まえ検証しながらも、自らの宗教コミュニティが元々どんな性質を備えているものであるかを、このようなSDGsの視点から見直し確かめることができるし、「これからの宣教」を考える有力なヒントが

ここにあると思います。

また、これらのことから「99か国148の教会というネットワーク」としてのルーテルという理解を、身近な宣教を考えるヒントとして活用もできるでしょう。近代の世界宣教はそれぞれの点に相当する全国各地の各教会が数的成長を求め、拡張することが宣教の優先課題と考える傾向がありました。もう数百年もそう考えてきたのです。この考え方の優れたところも依然としてありますが、ここに来て宣教のパラダイム転換がはっきりと見られるようになりました。SDGsと相性が合うのは、ネットワーク型の教会と宣教であって、従来の型と異なる局面が鮮明になっています。ネットワーク型については、インターネット・ウェブをイメージするとわかりやすいと思います。そこではそれぞれの点の大きさが決定的ではありません。点としての教会のような宗教コミュニティが小さいか大きいかではなくて、それぞれが持続可能な存在として各地、各所で成立していること、そしてネットワークのハブとして役割を果たしているかどうか、決定的な要素になります。自らも含めて他と他との間に結び合い、そして他と他を結び合わせるバイタリティこそが宣教力になってきます。そう考えると、「伝道」という古典的な教会の使命とその在り方も、新しい問いかけを受けるでしょう。それは持てる者が教え与え、持たざる者が教わり与えられ、伝える者と伝えられる者が一方的な流れになるわけでもありません。同じく、SDGsという世界の諸課題に教会が関与するとき、それは教会単独でどれほど力を発揮するかが問われているわけではありません。もちろんある一定の組織性があり責任体制があるからこそ、という側面もあるのですが、肝心なのは、他の宗教や他の機関、他の国々の人たちといった他者との共同の業に参画することの中に新たな教会と宣教の可能性が開かれていることです。

呼びかけ（calling）に応じる

ルーテルとSDGsの視点から「これからの宣

教」について考えてきました。LWFのかかわりを具体的なケースとして考えたのですが、当然のことながら、ルーテル以外のさまざまな教会や機関の取り組みについて、ここからさらに関心の幅を広げることもできるでしょう。そしてさまざまな出会いがここでは期待もできます。SDGsについては2030年までに社会の様々な場面でこれからも個人的でも、教会でも出会っていく課題でありつづけるでしょう。そしてもう一つ。今日は、これらの視点から、「これからの宣教」も考えてみましたが、そこには課題ばかりではなくて、私たちが今存在することに込められた深い恵みを思いめぐらす機会にもめぐりあえるはずだと考えています。なぜ、そうなのか。ひと言申し上げて終わりたいと思います。

Iコリント書9章で使徒パウロは宣教について述べていますが、その中に「わたしが福音に共にあずかる者となるためです」(28節)という一節があります。考えてみるなら、不思議な言葉ではないでしょうか。私にはそう思えて仕方がないのです。それは私自身が現代人の多くの人と共に人生も、そして信仰も宣教も、そして教会でさえも自分事として考えているからだと思います。SDGsで自分事といえばよい意味ですが、そこには自分を中心にしてみないと考えられない限界も隣り合わせです。そしてこれがコリントで直面していた問題のひとつです。パウロの勧めには、ただ自分勝手をやめなさいとか、もっとみんなのことを考えなさいとか、言われなくともわかっているようなことを繰り返したわけではなかったようです。

パウロには、こういう本当はだれも避けえない深い問題の解決には、自分か他人かではなくて、キリストが必要でした。キリストに出会った者にして、キリストを追い求める者、この二つにして一つのことに押し出されてパウロは宣教をし、教会を形成します。あえていえば“キリスト事”で自分事も他人事も捉え直し、かかわり直したのではないのでしょうか。SDGsのような地球大の事も、私たちの地域や協会にある身近な事も、このキリ

ストからの呼びかけ(calling)があり、それが奉仕の業(ディアコニア)となり、宣教(ミッション)となり、私たちの生きることそのものになる、ということが起こるように思います。その原点は、「共に生きよう」という神の呼びかけにある。そう考えるとき、ここでも教会は「共にみ言葉に聞こう」という呼びかけが宣教となり、果たすべき責務になるのだらうと思います。

注

- 1 本稿は、2021年9月19日に日本福音ルーテル市ヶ谷教会でルーテル学院講壇奉仕として行われた講演のために用意したノートを改訂したものである。当日は時間の制約もありポイントをしばった話となったが、当初依頼されたSDGsと関連付けた宣教考も下調べをしていくうちに奥深い問題があるため大幅に加筆した。また広く一般に知られているSDGsが、宣教の脈絡で、とりわけルーテル世界連盟の脈絡で考察されることは稀なことであると考え、講演ノートの体裁をできるだけ残して寄稿した。
- 2 マルティン・ルター「人は死から逃れることができるのかどうかについて」(1527年)多田哲訳『ルター研究』17、2021年、22-23頁。本巻は「宗教改革と疫病」を特集しているためその他の論考も参照されたい。
- 3 宮本新「ルターとアガンベン～生の様式(モード)をめぐって」『ルーテル学院研究紀要』54、2020年、22-24頁。
- 4 アノニマ・スタジオ編『暮らしのなかのSDGs 今と未来をつなげるものさし』KTC出版、2020年参照。
- 5 ローマカトリックとルーテルとのエキュメニカル運動の軌跡については以下の論文を参照。テオドル・ディーター「宗教改革とエキュメニズム その到達点、課題と展望—ルーテル・ローマカトリック対話の五十年」『日本の神学』57、2018年、9-25頁。
- 6 このローマカトリック教会とルーテル世界連盟の委員会には、日本福音ルーテル教会の牧師でルーテル学院で教鞭を取っておられた徳善義和先生と鈴木浩先生(お二方とも現在は引退教職でルーテル学院名誉教授)が長らくかかわりこれらの合意文書の作成の任を負うておられました。
- 7 共同声明については以下のプレスリリースを参照。
<https://www.lutheranworld.org/news/new->

beginning-lutheran-and-catholic-aid-agencies

- 8 保本正芳、中西將之、池田靖章『自分ごとからはじめよう、SDGs 探求ワークブック～旅して学ぶ、サステナブルな考え方』noa 出版、2019 年参照。
- 9 これらの開発目標はしばしば途上国における開発の課題と目標と考えられることがありますが、SDGs ではそうは考えません。途上国の開発目標があると同様に、先進国の開発目標があります。SDGs は途上国も先進国も含めたグローバルな問題です。その点で興味深い調査結果が Sustainable Development Report に見られます。日本国内の SDGs の状況も各国とあわせて調査レポートされており、毎年、その結果を見ると、目標 5「ジェンダー平等を実現しよう」、目標 12「つくる責任つかう責任」、目標 13「気候変動に具体的な対策を」、目標 14「海の豊かさを守ろう」、目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」などは 4 段階のうち最低評価を毎年のように出しています。
- 10 図 1 のイラストは『自分ごとからはじめよう SDGs 探求ワークブック』2 頁から転載。
- 11 以下の LWF のプレスリリース参照。
<https://wakingthegiant.lutheranworld.org/content/un-endorses-lwf-work-development-goals-151>
- 12 以下の LWF プレスリリース（2018. 10.11.）参照。
<https://wakingthegiant.lutheranworld.org/content/matter-faith-leave-no-one-behind-151>
- 13 これらは LWF の WG サイトで公開されている。以下を参照。
<https://wakingthegiant.lutheranworld.org>
- 14 WG のリーダシップトレーニングの一環としてライネが宗教と持続可能な開発について講義をしている。資料は LWF の WG サイトで公開されている。
<https://wakingthegiant.lutheranworld.org/content/rev-dr-antti-laine-religion-and-development-introduction-151>。